

委託事業実施内容報告書
平成27年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム（A）】

受託団体名：学校法人 南星学園サイ・テク・カレッジ那覇

1. 事業名称

・沖縄県在住外国人のための日本語教育事業

2. 事業の目的

・沖縄に在住する外国人が、日常生活の中で特に必要とする事柄について日本語をはじめ、地域の生活環境について学べる場を設けるとともに、県内に広く発信し、学習者の掘り起しに努める。また、沖縄県の実情と外国人のニーズに即した内容の講座を実施し、継続して学ぶ日本語学習者を増やすよう努めるとともに、学習教材を開発し、支援者を増やし研修することで、より多くの外国人の生活に必要な日本語能力を育成する。

3. 事業内容の概要

・本事業では、沖縄県内に在住する外国人の地域特性を把握し、学習者が通いやすいよう、継続できるよう、地域の日本語教室の拠点として学習支援事業を行う。本年度は、昨年度の課題を踏まえ、次の3つの取り組みを実施する。

- ① 本語講座の実施（日本語の基礎知識の習得に重点を置き、沖縄県の内情に合った事例・トピックを取り入れ内容を工夫する）
- ② 本語教育を行う人材の養成（県全体に広範囲に募集を行い、各地域におけるボランティアの活動を促す）
- ③ 日本語学習教材の作成（カリキュラム案の生活上の行為の事例の中から外国人のニーズに合わせたテーマを選択し、教室活動に活かせるように内容に工夫を行う）

4. 事業の実施体制について

・公益財団法人沖縄県国際交流・人材育成財団、琉球大学教育学部子ども地域教育コース、他の日本語学校と連携し、運営委員会への参加、講師の派遣、カリキュラムの作成等で連携して取り組んでいる。

5. 運営委員会の開催について

【運営委員】

1	遠山 英一	学校法人 南星学園サイ・テク・カレッジ那覇
2	仲尾次 嗣明	学校法人 南星学園サイ・テク・カレッジ那覇
3	宮里 孝夫	異文化間コミュニケーションセンター付属日本語学校
4	當山 善堂	沖縄キリスト教学院大学
5	高柳 清明	沖縄環境科学研究所
6	伊佐 善松	元財団法人国際研修協力機構
7	根来 全功	公益財団法人沖縄県国際交流・人材育成財団
8	宮里 新子	学校法人 南星学園サイ・テク・カレッジ那覇
9	小波本あゆみ	学校法人 南星学園サイ・テク・カレッジ那覇

【概要】

回	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	平成 27 年 7 月 23 日(木) 16:00～18:00	2 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	遠山英一、仲尾次嗣明、宮里孝夫、當山善堂、高柳清明、伊佐善松、根来全功、宮里新子、中島康夫、小波本あゆみ	1. 事業計画の説明と検討 2. 運営員会規約の説明と検討 3. 事業実施計画書の説明と検討 4. 募集状況の説明
2	平成 27 年 10 月 23 日(木) 16:00～18:00	2 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	遠山英一、仲尾次 嗣明、宮里孝夫、當山善堂、高柳清明、伊佐善松、根来全功、宮里新子、中島康夫、小波本あゆみ	1. 日本語及び日本語ボランティア育成講座、日本語学習教材作成の中間報告 2. 受講者の状況について、受講人数や出席状況の報告 3. カリキュラム(授業の内容)について写真付きで報告。 5. 各メディアへの募集広告掲載の報告
3	平成 28 年 1 月 27 日(木) 16:00～18:00	2 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	遠山英一、仲尾次 嗣明、宮里孝夫、當山善堂、高柳清明、伊佐善松、根来全功、宮里新子、中島康夫、小波本あゆみ	1. 日本語及び日本語ボランティア育成講座の終了報告と学習教材作成の経過報告 2. 文化庁委託事業の実施完了報告書(案)について 3. 報告書の提出について 4. アンケートのまとめについて

6. 日本語教育の実施

(1) 活動名称

・おきなわをたのしもう！基礎からの日本語講座(初級クラス)

(2) 目的・目標

・日本の中でも特有の文化・生活習慣をもつ沖縄社会の中で、日常生活に役立つ日本語講座を実施する。参加対象者の日本語習熟度に合わせ、初級・中級クラスに分け、日本語の基礎から応用まで無理なく日本語が身につく取り組みとする。外国人が日本語で行政サービスの問い合わせや地域住民とコミュニケーションが出来るレベルになることを目標とする。

(3) 対象者

・沖縄県内に定住する外国人

(4) 開催時間数(回数)

・ 30 時間 (3 時間× 全 10 回)

(5) 使用した教材・リソース

・平成26年度地域日本語教育実践プログラム(A) 日本語教育のための学習教材の作成「やさしい日本語教材」
・講師作成教材

(6) 参加者の総数 15 人※延べ人数ではなく、参加した人数を記載

そのうちの日本語学習者数 15 人

【出身・国籍別内訳】

中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	インドネシア	タイ	ペルー	フィリピン	日本
								1	

※その他の国籍と人数:

・米国 12人 ・ニカラグア 1人 ・カナダ 1人

(7) 日本語教育の実施内容

回	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成 27 年 8 月 1 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	15	授業への導入	プレースメントテスト／アンケート／あいさつの表現&ペアワーク／ひらがな（あ行～さ行）	宮里新子① 瑞慶覧やよい① 宮里孝夫①	
2	平成 27 年 8 月 8 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	15	自己紹介	あいさつ／自己紹介・他己紹介／発音練習／ひらがな（あ行～さ行の復習／た・な行の導入）	宮里新子② 瑞慶覧やよい②	
3	平成 27 年 8 月 15 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	13	沖縄の音楽	沖縄の音楽（八重山民謡）三線、箏、歌い手、踊り手のグループによる歌、踊りを鑑賞するとともに、民謡一つ一つの背景や歌詞の意味を説明を聞き、理解を深めた。	當山善堂① 瑞慶覧やよい③	小波本あゆみ①
4	平成 27 年 8 月 22 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	13	日本語の基礎	数字・時間／発音練習／ひらがな（あ行～な行の復習／は行の導入）	瑞慶覧やよい④ 宮里孝夫③	小波本あゆみ②
5	平成 27 年 8 月 29 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	10	日本語の基礎	値段・時間の尋ね方／ひらがな（あ行～は行の復習／ま・や行の導入）	瑞慶覧やよい⑤	小波本あゆみ③
6	平成 27 年 9 月 5 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	11	日本語の基礎	位置の表現（あれ、それ、これ）／物の尋ね方／ひらがな（あ～や行を復習／ら行・わをんを導入）	宮里新子③ 瑞慶覧やよい⑥	
7	平成 27 年 9 月 12 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	12	日本語の基礎	場所の尋ね方、場所の説明／ひらがなのまとめ／ひらがな長音・促音・濁音・半濁音の導入／発音練習	宮里新子④ 瑞慶覧やよい⑦	
8	平成 27 年 9 月 19 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	11	日本語の基礎	買い物・レストランでの会話表現／カタカナ（ア～サ行の導入）／発音練習	瑞慶覧やよい⑧	小波本あゆみ④
9	平成 27 年 9 月 26 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	10	日本語の基礎	日付・曜日／助数詞／体調を表す表現／発音練習／カタカナ（タ～マ行の導入）	瑞慶覧やよい⑨ 入江則光①	小波本あゆみ⑤
10	平成 27 年 10 月 3 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	12	日本語の基礎	基本的な動詞や形容詞を用いてお互いの国の文化などについて作文／発音練習／カタカナ（ヤ行～ンの導入）	宮里新子⑤ 瑞慶覧やよい⑩ 宮里孝夫②	

(8) 特徴的な活動風景(2～3回分)

取組事例①

【第 3 回 27 年 8 月 15 日】「沖縄の音楽」というテーマで、運営委員でもある當山善堂氏による琉球民謡と琉球舞踊を鑑賞した。毎年、受講生に大好評の授業であるが、ただ唄と踊りを見学するだけでなく、それぞれの曲の歌詞や振り付けの意味を解説することによって、時代背景やその当時の沖縄の文化・慣習を知ることができた。また、実際に三線を引いてみたり、カチャーシーを踊ったりと、沖縄の音楽文化を身を持って体験し、楽しんでいた。



取組事例②

【第10回 27年10月3日】「お互いの国の文化などについて作文」として、これまで学んできた単語やフレーズを使って、それぞれの国の文化や慣習などを紹介する活動を行った。今回の受講生には国籍は米国でも出身はエクアドルやチェコスロバキアという方々もいて、それぞれの国の特徴や良さを伝えようとボキャブラリーを駆使して文を作っていた。



(9) 目標の達成状況・成果

今年度の事業は、日本語講座において、初めて初級と中級の2つのレベルの講座を開講した。従来と違った新たな取り組みにより、これまでの事業内容をより進化させ、発展させることができた。中級クラスは、毎年受講者からの要望として上がっていたものであったが、「初心者を対象とする」日本語講座を目的としていたため、開講を見送っていたが、今回は要望に添って設定した。開講にあたっては講師の先生方と講座内容やレベルの差をどう付けるかに関してミーティングを重ねて準備を行った。全体で60時間、計20回の講座数の内、前半の10回を初級クラス、後半10回を中級クラスとし、間に休みを置かず連続して開講することで、受講者がスムーズに講座に参加し、中級レベルの授業内容に取り組めるよう工夫をした。その結果、受講者の反応も、「とてもたくさんのことを学べた。」「学校やスーパー、病院や銀行での会話を学べて助かった。」「素晴らしい講座と運営陣だ。感謝します。」等の反応があり、本プログラムの目的である「日常生活を営むうえで必要な日本語を学ぶ」ことを支援することができたのではないかと考えられる。

(10) 今後の改善点について

継続の受講生の出席の定着が難しく、出席者の減少が目立った。これまでに、欠席者へのメールや電話でのお知らせや講座内で講師による呼びかけ等、いろいろな対策を取ったがなかなか改善には至らなかった。定着率の向上が今後の課題である。

- (1) 活動名称
・おきなわをたのしもう！基礎からの日本語講座(中級クラス)
- (2) 目的・目標
・日本の中でも特有の文化・生活習慣をもつ沖縄社会の中で、日常生活に役立つ日本語講座を実施する。参加対象者の日本語習熟度に合わせ、初級・中級クラスに分け、日本語の基礎から応用まで無理なく日本語が身につく取り組みとする。外国人が日本語で行政サービスの問い合わせや地域住民とコミュニケーションが出来るレベルになることを目標とする。
- (3) 対象者
・沖縄県内に定住する外国人
- (4) 開催時間数(回数)
・ 30 時間 (3 時間× 全 10 回)
- (5) 使用した教材・リソース
・平成26年度地域日本語教育実践プログラム(A) 日本語教育のための学習教材の作成「やさしい日本語教材」
・講師作成教材

- (6) 参加者の総数 15 人※延べ人数ではなく、参加した人数を記載
そのうちの日本語学習者数 15 人

【出身・国籍別内訳】

中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	インドネシア	タイ	ペルー	フィリピン	日本
								1	

※その他の国籍と人数:

・米国 12人 ・ニカラグア 1人 ・カナダ 1人

- (7) 日本語教育の実施内容

回	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組のテーマ	授業概要	指導者名	補助者名
1	平成 27 年 10 月 10 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	15	日本語の基礎	・ 予定や行動について話す ・ 興味のあることや願望について話す ・ 場所の言葉 文法項目: 動詞~します/動詞~したいです	宮里新子⑥ 玉城あゆみ① 宮里孝夫④	
2	平成 27 年 10 月 17 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	15	日本語の基礎	・ 過去の行動について話す ・ 動詞の活用について(現在形/過去形/否定形) 文法項目:(動詞)~しました(場所)~で(人)~と(動詞)~します ・ 日本の常識クイズ ・ 日本のジェスチャークイズ	宮里新子⑦ 玉城あゆみ②	
3	平成 27 年 10 月 24 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	13	沖縄の音楽	・ 沖縄の音楽(八重山民謡)三線、箏、歌い手、踊り手のグループによる歌、踊りを鑑賞するとともに、民謡一つ一つの背景や歌詞の意味を説明を聞き、理解を深めた。	當山善堂② 玉城あゆみ③	小波本あゆみ⑥
4	平成 27 年 10 月 31 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	13	日本語の基礎	・ 形容詞の過去形の練習 ・ 漢字の紹介①(絵からできた漢字)	玉城あゆみ④ 宮里孝夫⑥	小波本あゆみ⑦

5	平成 27 年 11 月 7 日 (土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	10	日本語の基礎	・ 形容詞を使った表現 ・ 日本の歌を紹介	玉城あゆみ⑤	小波本あゆみ⑧
6	平成 27 年 11 月 14 日 (土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	11	日本語の基礎	・ 味の表現 (あまい/からい/すっぱい・・・など) ・ 料理をみて、「おいしそう/やわらかそう・・・」など をいう ・ 食材について ・ 食べられない物を丁寧に断る表現 ・ 日本人との交流	宮里新子⑧ 玉城あゆみ⑥	
7	平成 27 年 11 月 21 日 (土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	10	日本語の基礎	・ あいさつの後のスモールトークの練習 ・ 病気の時や病院での表現 ・ 季節の表現 ・ 漢字の紹介② 天気に関する漢字 ・ 日本人との交流	宮里新子⑨ 玉城あゆみ⑦ 入江則光②	
8	平成 27 年 11 月 28 日 (土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	11	日本語の基礎	・ 誘いの表現 (～ませんか) ・ 誘いを受け入れる表現 (いいですね。～ましょう) ・ 誘いを断る表現 (すみません。～はちょっと) ・ 誘いを断るときに理由を述べる (すみません。～から)	玉城あゆみ⑧	小波本あゆみ⑨
9	平成 27 年 12 月 5 日 (土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	10	日本語の基礎	・ 天気、家族、学校、仕事などを話題にして世間話をする ・ 台風や地震などの防災の表現	玉城あゆみ⑨ 宮里孝夫⑤	小波本あゆみ⑩
10	平成 27 年 12 月 12 日 (土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	12	日本語の基礎	・ 経験について話す (～たことがあります) ・ 日本のお正月について ・ 年賀状の習慣 ・ 干支について	宮里新子⑩ 玉城あゆみ⑩	

(8) 特徴的な活動風景(2～3回分)

取組事例①

【第4回 27 年 10 月 31 日】「漢字の紹介」として、絵からできた漢字を例にあげて説明した。ひらがな、カタカナはある程度習得できている受講者たちなので、漢字の導入は新たな目標を得たようで、とても熱心に取り組んでいた。山や川など、形から連想しやすい漢字の説明はかなり面白かったようで、分かり易いと好評だった。しかし、だんだん複雑な漢字が紹介されると、書き順や点、はらいの部分に四苦八苦していた。



取組事例②

【第4回 27年11月21日】「日本人との交流」ということで、日本語指導ボランティア講座の受講者と一緒に授業を行った。課題のプリントを配布し、それをボランティアに質問しながら解いていくという形式で行った。今日は2回目ということもあり、前回よりはお互いに打ち解けてきたようで、頻繁に質問が飛び交い、会話も弾んでいた。外国人受講者はなんとか相手に自分の質問を分かってもらおうと、持っているボキャブラリーを駆使して話しかけ、日本人受講者はいかに分かり易く説明できるかと、双方とも頑張っていた。



(9) 目標の達成状況・成果

(10) 今後の改善点について

継続の受講生の出席の定着が難しく、出席者の減少が目立った。これまでに、欠席者へのメールや電話でのお知らせや講座内で講師による呼びかけ等、いろいろな対策を取ったがなかなか改善には至らなかった。定着率の向上が今後の課題である。

6. 日本語教育を行う人材の養成・研修の実施

(1) 講座名称

・外国人のための日本語指導ボランティア育成講座

(2) 目的・目標

・外国人と地域住民との交流を促進するため、日本語指導ボランティアを育成する。在住する外国人へ地域の日本語ボランティアが積極的に関わり合えるように取り組む。また、同時に開講している日本語講座の受講生との合同授業や実際に指導ボランティアとして授業に参加させることにより、実践的な習得を図る。

(3) 対象者

・日本語教育・ボランティア活動に関心のある人

(4) 開催時間数(回数)

・ 30 時間 (3 時間 × 全 10 回)

(5) 使用した教材・リソース

・日本語バイリンガルへのパスポート ・講師作成教材

(6) 受講者の総数 16 人

【出身・国籍別内訳】

中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	インドネシア	タイ	ペルー	フィリピン	日本
									16

※その他の国籍と人数:

(7) 養成・研修の具体的内容

回	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	研修概要	講師名	補助者名
1	平成 27 年 10 月 3 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	16 人	日本語教育の基礎	日本語を母語としない人々と日本語で話すコツ	高橋 美奈子①	
2	平成 27 年 10 月 10 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	15 人	日本語教育の基礎	自分の日本語を振り返る (沖縄地域共通語)	高柳 清明①	
3	平成 27 年 10 月 17 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	14 人	日本語教育の基礎	異文化理解・多文化共生社会について (NGO の活動の紹介・他)	伊佐 善松①	
4	平成 27 年 10 月 24 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	14 人	文法の基礎	外国語としての日本語を知る①動詞	元山 由美子①	
5	平成 27 年 11 月 7 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	15 人	日本語教育の基礎	日本語教室の現状とボランティアの心構え	高橋 美奈子②	
6	平成 27 年 11 月 14 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	14 人	文法の基礎 ／交流	外国語としての日本語を知る ②動詞 外国人との交流	元山 由美子②	
7	平成 27 年 11 月 21 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テク・カレッジ那覇	14 人	文法の基礎 ／交流	外国語としての日本語を知る ③品詞分類	元山 由美子③	

						④形容詞 外国人との交流		
8	平成 27 年 11 月 28 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テ ク・カレ ッジ那覇	13 人	文法の基礎	外国語としての日本語を知る ⑤助詞 ⑥音声と表記	元山 由美 子④	
9	平成 27 年 12 月 5 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テ ク・カレ ッジ那覇	13 人	文法の基礎	外国語としての日本語を知る ⑦敬語 ⑧まとめ	元山 由美 子⑤	
10	平成 27 年 12 月 12 日(土) 9:00~12:00	3 時間	サイ・テ ク・カレ ッジ那覇	15 人	日本語教育 の基礎	「生活者としての外国人」 を支援するためのワークシ ョップ	高橋 美奈 子③	

(8) 特徴的な活動風景(2~3回分)

取組事例①

【第2回 平成 27 年 10 月 10 日】 「自分の日本語を振り返る」というテーマで、自分が日常的に使っている日本語について考えた。特に、沖縄県民が日頃何気なく話している言葉が、本当に標準語であるかどうかを客観的に検証する授業になった。いわゆる「ウチナーヤマトぐち」と呼ばれる沖縄独特の表現をいろいろ例にあげて学んだが、ほとんどの受講生はそれらが沖縄でしか使われないものであると初めて知ったと言いい、これからは意識して言葉を選んだり、自分の言葉の癖を見直し、正しい標準語を使うようにしたいという意見が多く出た。



取組事例②

【第2回 平成 27 年 11 月 14 日】 「外国人との交流」というテーマで、同時に開講している日本語講座の中級クラスの受講生の授業に参加し、講師のアシスタントを経験した。お互い緊張していたようで、なかなか会話が始まらないグループもあったが、次第に打ち解けてきて、終了の時間になってもまだ会話が終わらないグループがほとんどであった。このように、マンツーマンで外国人受講生と向き合い、彼らの質問に答え、また、こちらからも質問することで授業内容の理解をより深めることができたのではないかと。相手が理解しやすいように、分かりやすい、やさしい日本語を使うのが意外と難しいことに気付いたという意見もあり、どのように説明すれば伝わりやすいかを考えるよい機会となった。



(9) 目標の達成状況・成果

・本講座の受講生は、退職者や主婦の方が多く比較的年齢層も高いが、ボランティアなどの社会活動への参加意識が高く、「何か自分が役に立てることはないか。」と活動範囲を広げたいと考えている方が多かった。受講していく中で、日常的に使っている日本語だが、「ウチナーヤマトグチ」と標準語との違いや文法的に説明することの難しさ、外国人達の沖縄に在住している理由や背景などを理解することの必要性などを学び、「日本語ボランティア」の奥深さを改めて感じた方も多かった。アンケートの結果で、受講者全員が、日本語教育への理解が深まったと答え、日本語教育に関わってみたいと答えたことにより、今回の実施の目標は達成されたのではないかと。

(10) 今後の改善点について

・講座を修了した受講生の多くが、今後、日本語指導ボランティアとして活動をしたいとアンケートでも答えていたが、実際にどこで活動できるかとなると、本運営委員会や事務局で案内や紹介ができることは少ないというのがこれまでの現状であった。特に他の団体や学校で行っている日本語教室への紹介がなかなか難しいものがあつた。しかし、今年度よりサイ・テク・カレッジ那覇において日本語科が設置され、多くの留学生が学んでいる。その日本語科の授業において、受講生をボランティアとして参加してもらうことが可能になった。実際、一人の受講生が4月に体験的に授業へ参加予定である。これを足掛かりに、他の受講生のみならず過去の受講生へも周知し、多くの方に活動の場を提供していきたい。

7. 日本語教育のための学習教材の作成

(1) 教材名称

・「おきなわでのくらしのための日本語教材」

(2) 対象

・受講者用教材で、日常生活に必要な日本語がある程度理解できるレベルで、読み書きは困難な人が対象。

(3) 目的・目標

・沖縄に在住する外国人が日常生活に役立つやさしい日本語教材を作成する。日本語の基礎から応用まで無理なく日本語が身につく内容とする。外国人が日本語で行政サービスの問い合わせや地域住民とコミュニケーションが出来るレベルになるまでの教材を目標とする。沖縄県の内情に則した事例やトピックを題材に教材の作成を行う。

(4) 構成（総ページ数： 134 ページ）

- ・にほんごのもじ
- ・ひらがな表
- ・カタカナ表
- ・人と付き合う
- ・健康を保つ
- ・安全に暮らす
- ・余暇を楽しむ

(5) 教材の具体的な活用方法

・作成した教材を各自治体の国際交流機関、NPO 法人、自治体などに配布し、日本語教室などで幅広く活用して頂くように促す。

(6) 具体的な活用例

・当サイ・テク・カレッジ那覇には日本語科が設置されており、多くの留学生が日本語を学んでいる。そ

のカリキュラムの中で、会話の授業の際に、テキストとして本教材を活用することができる。

(7) 成果物のリンク先



8. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

- ・ 沖縄に在住する外国人が、日常生活の中で特に必要とする事柄について日本語をはじめ、地域の生活環境について学べる場を設けるとともに、県内に広く発信し、学習者の掘り起しに努める。また、沖縄県の実情と外国人のニーズに即した内容の講座を実施し、継続して学ぶ日本語学習者を増やすよう努めるとともに、学習教材を開発し、支援者を増やし研修することで、より多くの外国人の生活に必要な日本語能力を育成する。

(2) 目的・目標の達成状況・事業の成果

- ・ 今年度の事業は、日本語講座において、初めて初級と中級の2つのレベルの講座を開講した。従来と違った新たな取り組みにより、これまでの事業内容をより進化させ、発展させることができた。中級クラスは、毎年受講者からの要望として上がっていたものであったが、「初心者を対象とする」日本語講座を目的としていたため、開講を見送っていたが、今回は要望に添って設定した。開講にあたっては講師の先生方と講座内容やレベルの差をどう付けるかに関してミーティングを重ねて準備を行った。全体で60時間、計20回の講座数の内、前半の10回を初級クラス、後半10回を中級クラスとし、間に休みを置かず連続して開講することで、受講者がスムーズに講座に参加し、中級レベルの授業内容に取り組めるよう工夫をした。その結果、受講者のアンケートからも、「とてもたくさんのことを学べた。」「学校やスーパー、病院や銀行での会話を学べて助かった。」「素晴らしい講座と運営陣だ。感謝します。」等の反応があり、本プログラムの目的である「日常生活を営むうえで必要な日本語を学ぶ」ことを支援することができたのではないかと考えられる。また、日本語指導ボランティア育成講座の受講生は、退職者や主婦の方が多く比較的年齢層も高いが、ボランティアなどの社会活動への参加意識が高く、「何か自分が役に立てることはないか。」と活動範囲を広げたいと考えている方が多かった。受講していく中で、日常的に使っている日本語だが、文法的に説明することの難しさや外国人達の沖縄に在住している理由や背景などを理解することの必要性などを学び、「日本語ボランティア」の奥深さを改めて感じた方も多かった。

(3) 標準的なカリキュラム案の地域での活用について

- ・ 標準的なカリキュラム案から生活上の行為の事例の中で、実際の生活でよく使う事例をピックアップし、その例に沖縄にある地名や商業施設、観光地等の名称を当てはめ、日常生活の中ですぐ使える会話を作成した。本校の日本語科や近隣の日本語学校での授業に取り入れ、会話の練習を繰り返すことで、実際の生活の中でスムーズに買い物や乗り物に乗る、病院で受診することができるようになると考えられる。もし、アプリとして開発ができれば、スマートフォンやタブレット端末などでその場で検索・確認することができ、単なる辞書機能よりも外国人にとって役に立つのではないかと考えられる。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果 等

・運営委員会に、沖縄県国際交流・人材育成財団の国際交流課の課長に参加してもらったことにより、財団が把握している県内在住外国人の人数や現状をうかがうことができ、また、県内各地でどのような日本語教室や支援、またはイベントなどが行われているのかを知ることができた。それによって、本事業が目指す目的のために、具体的にどのようなカリキュラム内容にすればよいか、受講後の受講者の活躍の場の提供など、これまでの事業実施の課題として毎年上がっていたことについての解決の糸口を得ることができた。

(5) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

新聞広告(日本語講座)・7月16日と23日付けの Japan Update に掲載。(添付資料参照) ・今回の日本語講座は、講座開始前までに、問い合わせ件数31件、応募者23名があった。英字新聞への2回の広告掲載だけでなく、取材記事の掲載もあったため、大変効果があった。 ・新聞広告(日本語ボランティア講座)・9月24日付けの週刊ほーむぷらざ誌「Info ぱれっと」に掲載。(添付資料参照)・情報誌への掲載後、28名の問合せがあり、当初15名の予定であった定員を16名に増やし対応した。新聞に広告を掲載後、2、3日で定員に達するほど反応がよく、人々の関心の高さがうかがえた。

(6) 改善点、今後の課題について

・受講生の出席の定着が難しく、出席者の減少が目立った。これまでに、欠席者へのメールや電話でのお知らせや講座内で講師による呼びかけ等、いろいろな対策を取ったがなかなか改善には至らなかった。定着率の向上が今後の課題である。講座を修了したボランティア達の活動の場をどう広げていくか。本校の日本語科においてボランティア活動の促進をすること、及び、他の日本語学校への打診をすることによって「日本語ボランティア」の存在を知ってもらい、多くの人が参加、活動できるようにしたい。